

## 名辞と翻訳 Issues on Synonymy in Translation

佐良木 昌<sup>†</sup>

Masashi Saraki

<sup>†</sup>明治大学, NPO言語研究アソシエーション

Meiji University, The Association for Language Research

saraki@st.rim.or.jp

### Abstract

Synonymy needs to be considered when paraphrasing words and phrases. The paraphrase maintains essential identity between the terms in order to hold semantic cohesion in the context. When utilizing synonyms in the context, it is necessary to contemplate the difference between them and select one based on the semantic class structure of the synonym group. Paraphrasing through a substitution or summarizing requires semantic cohesion and hence can convey more than words. Translation is creative writing, which means making semantic equivalence between different languages.

**Keywords** — Synonymy, Paraphrase, Semantic Cohesion

### 1. はじめに

同じ対象を指示するのに、異なる名辞があるということは、一つのことを多くで表すということである。同一の対象を、いくつかの同義語で表すことがある。あるいは、同一対象を別の対象を指示する言葉で表す隠喩という技法もある。こうした、一つのことを多くの名辞で表すことを異語同義 *synonima* と云う。他方では、多くのものを一つで表すことを同名異義 *homonima* と云う。言い換えれば、「単に名称のみを共有して、その名称に依って意味される実体概念を異にするものはホモニマと呼ばれる。」[1]異語同義も同名異義もアリストテレスの『カテゴリー論』、その第一章冒頭において論じられている事柄である。[2]

翻訳もまた同じ事柄を別の言語で表現するという意味では、異語同義の相貌を見せる。表現構造は言語が異なれば異なるが、翻訳は、表現構造の相違にもかかわらず、異なる言語間における意味的等価を実現する。特に言語系統的にも文化的にも断絶した言語間に於ける翻訳とは、異なる言語の間に、意味的等価の関係を作り出す表現行為である。[3]

### 2. 名辞と換言

#### 2-1 換言と同義性

換言においては意味的等価の担保は必須である。前言と換言とが同義性(本質的同一性)を保って文脈における

意味的結束を実現するのだからである。そうでなければ換言が前言の修正に陥ってしまう。翻訳において、(日本語で)「考えついた別の表現が和英辞書に未集録であるという状態が連続して発生すると、同義性の制約が徐々に甘くなっていく、すなわち意味のずれが拡大していく恐れがある」。[4] そうした意味のずれを回避するには同義語を使うと便宜であるが、同義語群の本質的な意味規定と同義語間の種差とを踏まえて換言の文言を選ぶことが肝要となる。[12] その選択時には、同義語群の概念階層、たとえば、全体と部分、上位と下位、実体と動的過程などを考慮して文言を選ぶことが求められる。とりわけ、動詞中心の主述構造の名詞化、ハリデーの云う文法的比喩(語彙的結束を示す名詞化の手法[5])は、同義性、別言すれば意味的等価を担保しなければならない。その場合、表現の視点が変わるという転換点でもあることが翻訳の留意事項となる。Biberらの指摘によると、Hallidayが区別するところは、「名詞」が意味する範疇は「実体」に関するが、しかし「名詞化」が関わる範疇は「過程」と「質」とに関わるという点である。[6] こうした名詞化は主語—述語の陳述構造を代行することから[7][8]、叙述が過程の動的描写から過程の客観的写像に換わっていることが留意点となる。また同義表現の選択においては、解釈が二つに分かれるような同義語の使用は避けるべきだろう。一例を挙げれば、物質名、蟻酸プロピルを分子式  $C_4H_8O_2$  で置き換えると、酪酸と解釈される恐れがある。そのため構造式  $H-C-O-C_3H_7$  で言い換えることが妥当であろう。

日本語表現では同じ語が繰り返される傾向に対して、英訳文では一般論として同じ言葉を繰り返すことを避ける傾向にある。但し、英文において主語 I の反復は常態であり、氏名を人称代名詞に代えて繰り返すのも英文では普通である。他方、物あるいは事柄については、言い替えが推奨されている。文体論としては、代名詞の反復に作家の特質を認めることが必要であるが、本稿では割愛する。

#### 2-2 英文における換言

現代英語の前方照応の技法を参照すると、接続詞・接続副詞類を用いず、1) 同義語や上位下位概念の語により前方照応を形成したり、2) 動詞派生の抽象名詞の主語を建てることにより前文中の動詞への前方照応を実現する事

例に富む。また、3) 抽象名詞が先行文の全体あるいは一部を要約することで前方照応を実現するという手法は、いわば意味的な文の連結であり、高度な表現法といえる。こういった動詞派生の抽象名詞への指向は、Roger Fowlerの指摘では[9]、英語の現代小説においては、(1) 動詞中軸から抽象名詞句中核構造へ遷移しており、(2) be 繫辞の判断文を回避する傾向にある、とのことである。同じ傾向を学術英語において観察したのが、Biber, DとGray, B.である。[6] その知見では、Subject(Noun)–Predicate(Verb)の構造は能動的な表現である、よって主体中心の表現であるが、これに対して、抽象名詞を核とした句の構造は静的な、したがって観察者の視点での表現と考えられている。

英文における換言 paraphrase は単なる言い換えにとどまらず、重要点の強調であり再論 Restatement として捉えてもよい。Kane に拠れば、Restatement は、二つのタイプに分けられ、1)、否定と肯定とによる主張の繰り返し、2) 詳述 specification を追加することによる換言の二つである。[10] 後者には、抽象的な概念をその具体例の全列挙で繰り返す方法がある。以下に、Kane の取り上げた例文を、一部再録する。

Bound to the production of staples—tabaco, cotton, rice, sugar—the soil suffered from erosion and neglect.  
 主な農産物—タバコ・綿花・米・砂糖を生産することに縛られて、土壌は侵食され放置の状態に曝された。 [試訳]  
 ここで、換言の諸形式を整理しておく。

α) 同義語による換言

- ・総称を個別事例の列挙で言い換える (the production of staples > tabaco, …)
- ・個別名称を上位概念の一般名称で言い換える (CT scan > this technology)

β) 同語反復の詳細化

- ・反復の際、同じ名詞を使っている、形容詞が新たに付加されたり、別の形容詞が使われているときは、その形容詞は新しく内容を追加しており、より限定した事柄を指示している。
- ・肯定形／否定形の翻案による反復

γ) 文法的比喩(名詞化、要約)

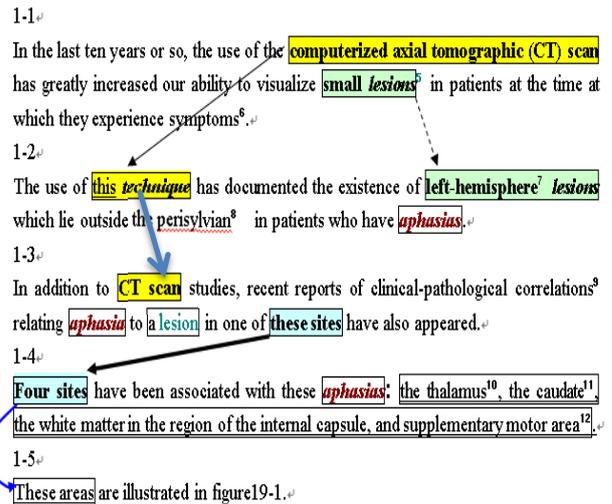
前文の要約による換言例を以下に示す。

…… If the chain reaction failed to occur, the TNT would blow the very rare and dangerous plutonium all over the countryside.

Because of this possibility, Jumbo was designed and built. Originally it was 25 feet long, 10 feet in diameter and weighed 214 tons. Trinity Site: 1945-1995.

<https://www.atomicarchive.com/history/trinity/jumbo.html>  
 先行パラグラフの末文と、後続パラグラフの冒頭文とが、意味的に連関することで、第一パラグラフと、第二パラグラフとが関連する。これで文脈が形成される。さらに、仮定の接続詞 if と助動詞 would とが、可能性 this possibility に対応していることでも、二つの文が照応関係にあることが分かる。抽象名詞が先行文の要点を表すという意味的な文の連結を実現している。

ここで英文における言い換えの別例を挙げる。



[Caplan, D., "Neurolinguistics and linguistic aphasiology An Introduction" Cambridge University Press, 1987]

上記英文の換言手法を以下に示す。

- ・具体例を一般論で言い換える

1-1 the use of the computerized axial tomographic (CT) scan

1-2 The use of this technique

This という限定詞で、照応関係にあることを明示している(具体例を一般化で言い換える場合は限定詞が必ずいる)。

- ・同語反復を詳細化する

1-1 small lesions > 1-2 left-hemisphere lesions

より限定した範囲を指示しており、単なる繰り返しではなく詳述である。「微少な損傷」→「左脳の損傷」

1-2 left-hemisphere lesions > 1-3 a lesion in one of these sites

損傷→損傷部位→損傷のある場所 →site 「何か起こる場所／何かが行われる場所」という展開である。前置詞 in が site の中に一個の損傷 a lesion が現れていることを示している、these site が脳の何らかの機能部位であることが分かる。次の文に、four sites と出てくるので、ここで了解が可能である。

2-3 日本語文における換言

日本語における換言の諸形式について、具体例を示す

(下線は引用者による)。

・[同語反復] 同じ言葉を繰り返す形で語彙的結束を強めて文脈を形成する。[11]

そこで人間の頭が複雑になればなるほど、観察される事物も複雑になって来る。複雑になるのではないが、単純なものを複雑な頭でいろいろに見るから、つまりは物自身が複雑に変化すると同様の結果に陥るのであります。 漱石「作家の態度」

・[代示] 接続詞や繋ぎの言葉を使わずに、先行文にある言葉を言い換えて後続文の主語に採用することで繋ぐ手法を、オッカムの言葉 *suppositio* を借りて代示と言うこととする。指示対象が不明瞭になりがちな代名詞とは異なり、指示対象を明瞭に示す。たとえば、動詞で終わる述語文、その動詞句を名詞句に変換して次文の冒頭建て文を起す。代示に用いる語句は、前文で用いた言葉、その一部の繰り返しや言い換えである。

…基づいて領域を三つに分ける。この三分割によって、領域間の流通がはっきりする。 作文

必ず動く。動くにつれて明かな点と暗い点ができる。その高低を線で示せば平たい直線では無理なので、やはり幾分か勾配(こうばい)のついた弧線すなわち弓形の曲線で示さなければならなくなる。 漱石「現代日本の開化現代日本の開化」

点→線→孤線という換言の連続でより深い視点での展開を企図する文章展開と評価できる。

・[要約による反復] 前文の要点を、次文の主語として建てたり、受け継ぎの文言を挿入することで同義的一貫性を担保する手法である。下に事例を採録する(下線は引用者による)。

もともと客観の極端に至ると科学者だけに通用する叙述になり、主観の極端になると、少数の詩人のみに限られる叙述になりますから、例外になります。しかし常人はこの両極の間を自由勝手にうろろしているものであります。 漱石「作家の態度」

二つの「極端」を「両極」として俯瞰的にまとめ上げている。

### 3. 翻訳と同義性

#### 3-1 翻訳と同義性

以上は、同一言語における同義性の問題であった。ここでは、日英翻訳における同義性の問題に焦点を定め、日本語で表現されたある対象の英訳技法について言及する。日本語で表現された対象と英語で表現された対象は意味的に等価であること、すなわち翻訳における同義性をいかに保証するかが問題となる[11]。本稿では限定された範囲で論じるに留まる。ここでは、主節主客を修飾する連体節の翻訳について、連体節と主節との論理関係そして連体節の文体的特質という二点から検討する。

日本語では、連体節の表現が係り受け関係を示して文

の枠組みをなしていると共に多義といった幅の広さを有している。この連体節を、論理的な表現に言い換えることで、多義を解消しつつ伝達すべき意味あるいは情報を最適に分節かつ再配列する。この表現構造の換言によって英語表現への見通しを可能にする。たとえば、主節主名詞(主客)を修飾する連体節が時や条件を表している場合、連体節を連用節に換言して英文従属節/分詞構文などを用いて翻訳するというロジックは、英語以外の西洋諸語の翻訳にも通じるロジックである。[12] 意識と云われている翻訳手法を翻訳文法として定式化するためのものである。同時に、連用節への換言は、伝えるべき前件後件の論理関係が連用節末に明示されることから、連体表現の曖昧さを解消することができる。詳細は文献[13][14]を参考されたい。

しかし、他方、連体節の文体的特質が見逃されてはならない。連体表現では、主節主客によって連体節が包摂されることにより、連体節の行為や状態と主節のそれとは統一されるといえる。そのため、連体節から主節へと事柄が自然に展開されるのである。主体を囲む環境や主体が抱える事情を連体節で表現すれば、場面における主体行為の自然な展開を表すことができる。主節主格を修飾する連体節は、この自然な成り行きを表現するための優れた表現態であると評価できる。文芸作家は、背景(連体節)と主動作(主節)とで絵になるように描くだろう。読者は論理が先に立たず自然な流れを感じるだろう。しかし、連用節では興醒めである。論理が顕在化して角が立つからである。文芸の翻訳においては、文体の翻訳という技法が求められる。[13] 例えば、主節主部を修飾する連体節の意味が、予備的背景的情報の場合にはシテ形接続の連用表現に換言でき、これを分詞構文の形で英訳する手法を本稿筆者は提案しているが、俳句英訳への適用が検討されている。俳句の「心象風景描写は、情報論的観点からすると予備的背景的情報であり、意味的には付帯状況の描写である」ため、上記提案の翻訳手法は「俳句そしてポエムの自然翻訳によくなじむであろうことが推察される。」[15]

#### 3-2 翻訳における意味的等価

原言語と目標言語との間で共通する一般的認識がない場合がある。「ある言語が他言語から新しい概念を輸入する際、構造を意識せずに(単語で)表現できる概念は、新しい語彙規則を導入することで容易に表現能力を拡大することができるが、表現構造の変化を伴うような複合概念の場合は、簡単ではない。」[16] それゆえ、原文の表す対象像と訳文で表された対象像とが一致する、少なくとも原像に近いという翻訳結果を実現するための翻訳技法が、すなわち日英語の間に意味的等価の関係を創り出す翻訳技法が、

求められる。平易な和文や慣用句はその意味を、概念的あるいは説明的につかんだうえでない英文生成が困難である。ここに論理的表現への言い換えの必要性がでてくる。「意味を汲んで訳すより仕方ない」との見解は、よく目にするものである。このサイデンステッカーの云う意識について[17]、以下で踏み込んで検討してみよう。

原文において表現された文化的あるいは慣習的特質を一般論的に解釈し、その類型表現でもって言い換える。この換言により個別性が希釈されて上位概念の論理範疇として解釈される。論理範疇が特定できれば、目標言語の意味類型から適切な表現を採ることで、翻訳文とする。例えば、「花子は戌の日に帯を締めて、予定日に備えた」(a)を、「お守りを身につけて花子は安産に備えた」(b)と言い換える。岩田帯を pregnancy belly band としても風習が異なり等価物にはならない。安産祈願 prayer for easy childbirth という共通認識のレベルで、英語における安産に対応する表象や風習、そしてそれらの類型表現を探索して英語表現を決める。その英語類型表現は幾通りもあり、その選択には、翻訳者の英米文化の経験度、その文化に対する価値判断や選好が作用するだろう。ここで深層学習型機械翻訳を試してみる。

(a): Hanako tightened her sash on the dog days and prepared for her due date.

(b): Wearing the talisman, Hanako prepared for a safe delivery.

このように換言を介さないと意味が通じる訳文にはならない。日本文化特有のあるいは慣習的に固有の表現を、普遍的な共通認識である一般論に還元して言い換える必要がある。[18] この場合、抽象レベルで日英表現が意味的に等価あるいは同義と言えるだけである。抽象的な同義性は翻訳の限界を示すと同時に、言語は絵画のように表現対象の固有性をそのままに表現するものではないという言語表現の特質を顕している。

#### 4. 結論的所感

本稿では換言の諸形式について言及した。i) 同義語や代示による言い換え、ii) 同語反復の詳細化、iii) 動詞中心の主述構造の名詞化や前文の要約による言い換えでは、意味的等価を担保しなければならないことを本稿では指摘した。とりわけ翻訳においては、i) 同義語群の概念階層に留意すること、iii) 過程の動的描写から過程の客観的写像に換わるという転換を踏まえることが肝要となる。

日本語の意味類型があり、英語の意味類型がある。翻訳による双方の同義性、言い換えれば意味的等価は、論理諸範疇(普遍概念)を介して実現される。このような翻訳の制式を前提に翻訳における同義性を担保する翻訳文法

と技法とが求められる。無限とも言える多様性を持った言語表現を異なる言語間で意味的に正確に対応づけることは困難である。しかし、概念の階層構造に着目して、一定の粒度以下の概念をグループ化すれば、意味類型の数は有限に押さえることができると考えられる[16][19]。従って、これらを介して言語間において言語表現を対応づけることが翻訳文法の課題となるだろう。

#### 謝辞

本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)「基盤研究(C)」(課題番号 21K00744、2021年度～2023年度)高度翻訳知識に基づく翻訳文法の構築に関する研究による支援を受けている。

#### 参考文献

- [1] 山内得立, “アリストテレスの哲学 上”『ギリシャの哲学 IV』, 弘文堂, pp.188-189, 1960.
- [2] アリストテレス, “カテゴリー論”, アリストテレス全集1訳: 山本光雄岩波書店, p. 3; pp4-57, 岩波書店, 1971.
- [3] 佐良木昌, “アナロギア思考の系譜と言語表現の論理-発見の方法としてのアナロギアの構築”, 信学技報 108(427), 45-49, 2009.
- [4] 白井諭, “日英機械翻訳のための言語知識の構築と記述に関する研究”, 『言語過程説の探求 第三巻』 pp.135-154, 明石書店, 2017.
- [5] M. K. A. ハリデー, “機能文法概説”, 訳: 山口登, 笈壽雄, くらしお出版, pp. 535-579, 2001
- [6] Biber, D. and Gray, B., “Nominalization the verb phrase in academic science writing”, in “The Verb Phrase in English Investigation Recent Language Change with Corpora”, ed. Aarts, B., Close, J., Leech, G., Wallis, S., pp. 99-132, Cambridge University Press, 2013.
- [7] 竹内祐治 “修飾”構造に組み込まれた「陳述意味」, 『英語英米文学』, 中央大学英米文学会第 29 集, pp.247-s272, 1989.
- [8] 佐良木昌, “機械翻訳の訳文改善-英文の名詞句構造 後置修飾構造の訳出方法”, 言語処理学会第 7 回年次大会ワークショップ論文集, pp. 41-44, 2001.
- [9] Fowler, R., “Linguistics and The Novel” pp. 103-113, Methuen, 1977.
- [10] Kane, Thomas, S., “The Oxford Guide to Writing”, Oxford University Press, pp. 129-132, 1983.
- [11] 牧野成一, “日本語を翻訳するということ”, pp. 149-179, 中央公論新社, 2018
- [12] 佐良木昌, “機械翻訳における同義性・多義性の諸問題: 英語汎用動詞の和訳を中心に”, 信学技報 116(529), 61-66, 2017
- [13] 佐良木昌, “時枝古典解釈文法から翻訳過程論への示唆”, 『言語過程説の探求 第三巻』 pp.323-340, 341-369, 375-377, 明石書店, 2017.
- [14] 佐良木昌, “連体節の従属節 A 類・B 類・C 類への換言: 連体連用の互換性”, 信学技報 119(484), pp. 13-18, 2020
- [15] 新田義彦, “心象風景の描写における俳句とポエムとの差異”, 電子情報通信学会 2019 年総合大会, 講演番号 AK-1-2, 2019
- [16] 池原悟, 佐良木昌, 宮崎正弘, 池田尚志, 新田義彦, 白井諭, 柴田勝征, “等価的類推思考の原理による機械翻訳方式”, 信学技報 Vol. 102, no. 491, pp. 7-12, 2002
- [17] E.G. サイデンステッカー, 那須聖, “日本語らしい表現から英語らしい表現へ”, 培風館, pp. 4-4, 1962.
- [18] 佐良木昌, “判断表現・感情表現の論理構造 ~ 翻訳においての普遍の意味 ~”, 信学技報, vol. 122, no. 419, pp. 42-47, 2023.
- [19] 池原悟, “非線形言語モデルによる自然言語処理: 基礎と応用”, 岩波書店, 2009